

志を引きつぐ

園長 児嶋 草次郎

ソメイヨシノ桜が満開、その周辺の木々も一斉に若芽を吹き出し始めており、生命の躍動を感じる季節となっています。大地から、またこの清冷な春の空気から、生物たちが思う存分エネルギーを吸いこんで、新たな成長に向けて蠢（うごめ）き始めています。人間も同じです。子供たちの生命力が脈動しています。

コロナ感染症も3年目に入っております。なかなか終息に向かわず、次々に新たな変異株が生まれ拡大を繰り返しています。その度に子供たちの成長の節目となる行事を中止にせざるを得ないのですが、時は待ってはくれず、学年は1年1年確実に上がっていきます。

そういう状況の中で、毎年恒例の「高校生自覚旅行（3月31日～4月2日）」を決行しました。コロナも3月に入って小康状態を保っており、少々のリスクを犯してでも実施することで、子供たちも自分たちの運命を変えるチャンスを新たに獲得できると判断したのです。今年のコースは岡山孤児院発祥の地を訪れるのが目的であり、今回逃すと、この友愛園のルーツを知らないままに高校を終える子が出て来ます。三コース（山口 吉田松陰、高知 坂本龍馬、岡山 石井十次）の中では一番重要な旅です。

3月31日（木）、早朝5時17分、友愛社を貸切りバスで出発。新高校生も含めて子供14名、職員6名の2泊3日の旅です。子供たち全員、岡山は初めてです。出発してすぐ、子供たちが眠ってしまわないうちに、私は次のように話しました。

「自覚旅行、三コースのなかで一番重要な旅行です。みんなは、自分の人格を作っていくためには、自分、家族のルーツとはどのようなものなのかを自分なりに整理していかねばなりません。過去を自分なりにプラスに整理して初めて、未来に希望を持って生活することができるようになります。そうしないと、ずっと劣等感を持って生きていかねばならない。

それと同じように、石井記念友愛園で生活する意味をも自分なりに前向きに整理していかねばならない。単に施設出身という自覚だけだったら、社会に出てプライドや誇りを持って生活することは難しい。石井記念友愛園は岡山にあった。石井十次先生はなぜ施設を宮崎に移したのか。岡山から宮崎に施設を移すことがどれほどたいへんなことなのか想像してほしい。1か月後友愛園を岡山に移すと言われたらみんなは反対するだろう。石井十次先生は、どんなにお金をかけてもリスクを犯しても、宮崎の大自然の中で子供たちの教育をした方が、子供たちの未来を切り開いていけると考えた。そういう所で、みんなは現在生活し、修行している。」

高速に乗ると夜も明け、バスは北へ北へと疾走。自覚旅行の時は毎回感動することですが、宮崎から大分への峠周辺の山々に咲く、山桜の圧倒的な生命力。自然森の中に点々と星のように花を咲かせています。昔は、石井記念友愛社を囲む森でも山桜の自生はよく見られましたが、杉等の植林の進む中で消えていきました。県境の山々はまだ自然林が多く、回りの雑木に負けることなく満開の山桜が共生し合っています。驚くべきことは、ほぼすべて、野鳥の糞の中から芽を出し、成長したものであ

るといふことです。

8時前に大分県臼杵港着。フェリーにバスごと乗りこんで8時50分臼杵港発。海は静かですが、霧雨の中を船は進みました。四国八幡浜港まで2時間20分ほどありますので、子供たちはあちこち探検しているようでした。私は持参した新聞の切り抜きをテーブルに広げて、一人物思いにふけりました。2月24日、ロシアが突然隣国のウクライナに侵略を初めて以来、このことが気になって仕方ありません。ウクライナは、せっかくソ連の呪縛から解放されたのに、また、ロシアは属国にしようとしているようです。あの第二次世界大戦当時の価値観をそのまま持ったロシアのリーダーの存在に恐怖を感じますし、この力の論理がまた通るようになれば、アジアの「平和」も崩壊していくでしょう。私たちは子供たちの未来を作る仕事をしているのに、その地盤そのものが崩れていきます。弱い人の尊厳や、子供たちの未来を奪う戦争は絶対に受け入れられません。

11時頃に八幡浜港に到着。しばらく走ってまた高速に乗り、一路岡山へ。小雨まじりの霧が濃くなり、なんだか歴史をさかのぼっていくような気分になります。霧が晴れると、山桜やソメイヨシノの満開の山のふもとを、左下に町や街を見下し、またと遠くに瀬戸内海を望みながら、そしていくつものトンネルをくぐりながら、バスは北へ向けて快走します。子供たちはゲームをしたり映画を見たりしながら、飽きることなく時は過ぎていきました。

伊予灘サービスエリアで昼食を取り、瀬戸大橋の途中の与島に寄り、岡山の後楽園に着いたのは3時頃でした。岡山藩主が約300年前に作られた回遊式庭園です。水戸の偕楽園、金沢の兼六園と共に「日本三名園」だとか。当時お殿様は、暗殺の恐れもあるので私たちのように自由に旅行はできませんでした。そこで財力のある藩ではこのような大きな庭園を作り、時々旅行気分を味わったわけです。私たちが殿様気分です散策をしました。岡山孤児院時代にも子供たちが遊びに来ています。園内のソメイヨシノは狂おしいほどに鮮やかに咲いていました。

その後、4時半頃、私たちは岡山孤児院のあった岡山市内門田屋敷の三友寺前に、立つことができました。事前連絡はしてなかったのですが、三友寺住職勘藤晋先生御夫妻にお会いすることもできました。ずうずうしく敷地奥の墓地内にある記念碑まで入ることをお願いし、快く受け入れてくださいました。当時4ヘクタールほどあった岡山孤児院敷地もすっかり住宅街に変貌してしまっており、その頃をイメージできる場所はこの狭い墓地内だけです。予約もせず、勘藤先生には大変ご迷惑をおかけしました。コロナ渦中であり、今回はできるだけのをしぼって人に会わないつもりでしたが、祈禱場跡地にも、どうしても子供たちを立たせてみたくなりました。

この日の宿は、倉敷の近くの金光（こんこう）町内にある土佐家旅館でした。金光町と言えば金光教の本部のある所。1859年に始まった神道系の宗教だそうです。職員ができるだけ廉価な宿をインターネットであちこち探してここに行きつきました。お導きでしょう。

私は翌朝、いつものように早く起きて周辺を探索しました。歩いて数分の所に巨大な神殿（祭場）や会堂等が建ち並び、荘厳な雰囲気があります。今や大学を初め高校等もいくつか経営する教団のようです。その大学を卒業した男性が昨年まで友愛園に働いてくれていました。ちょうど朝の6時、祭事が始まっていたので、私もお参りしておきました。石井十次の時代も何らかの御支援をいただいたと思います。

4月1日（金）は、まず上阿知の診療所跡地を訪ね、その後、大原孫三郎が少年時代学んだ備前市の閑谷（しずたに）学校を見学し、そして倉敷にもどって大原美術館と美観地区で楽しみます。8時前に旅館を出発。バスの中で私は、心の準備をするため、子供たちに次のように話しておきました。

「石井十次先生は、岡山で医学の勉強をしていたのだけれど、試験にも落ちたりして精神状態がお

かしくなっていました。静養を兼ねて上阿知の診療所で実習をします。ここで貧しい母子に出会い、その少年前原定一を救います。みんなもそうだと思うけど、人間は、イライラしていたり心に悩みがあったりしたら、人を助けようなんて気持ちにはなれません。自分のことしか考えない。なぜ石井十次先生の気持が変わったのか、それは、上阿知が故郷高鍋馬場原の雰囲気と似ていて、村の人々もやさしく受入れてくださったから。上阿知の人々は、今も、診療所跡地と隣りの大師堂をしっかり守ってくださっています。

大原孫三郎さんは、石井十次の支援者でしたが、少年時代（14歳）2年間ほど閑谷学校で学んでいます。岡山からは随分離れているので、通うことはできないから寮生活です。友愛園の生活と一緒にです。孫三郎さんは、金持の息子で我がまま放題に育ち、親も、これじゃいけないと考え、閑谷学校で集団生活をさせることにしたのだと思う。孫三郎さんは、ここでいじめもうけたようです。この集団生活で弱い者の立場に立たされた体験があったから、石井十次先生と出会って、心が通い合えるようになったのだと思う。

児島虎次郎は、金持ではなかったのに、大原家から奨学金をもらって東京美術学校に通いました。みんなもこれからお世話になるかもしれない、九州保健福祉大や岡山理科大学の石井十次記念奨学制度みたいなものかもしれません。虎次郎は、孫三郎さんからお金を出してもらってヨーロッパに留学しましたが、当時、日本にまだ西洋の絵がなかったのに、若い絵描きたちの勉学のために西洋の絵を日本に持って帰りたいと考えます。そしてお金を出してくれと孫三郎さんに頼み、今だったら何十億かのお金を孫三郎さんが与えて集めたのが、今の大原美術館のもとになっています。

これらの話から言えることは、人間一人では何もできないということ。みんなもそうだが、人の縁を大事にしなければならない。」

9時30分、上阿知の診療所跡地には、岡山市内で「石井十次に学ぶ会」というボランティア団体を結成し、様々な活動をされている会長の東森貢様を初め10名弱の方が待っていてくださいました。互いに挨拶をし、記念植樹（カンナ、アジサイ、フヨウ）をし、馬場英子様から、石井十次と上阿知との関りについて話していただき、心のあたたまる交流となりました。馬場様の「人々との出会いが石井を救った。」というお言葉が強く印象に残りました。「石井十次に学ぶ会」の皆様から豪華なお昼の弁当まで一人ひとりいただき、恐縮致しました。ありがとうございました。

次は備前市の閑谷（しずたに）学校です。子供たちはもちろんですが、職員も私も初めての見学です。関心がなかったわけではありません。15年前に、高鍋町美術館長だった土公武二郎さんや大原美術館の副館長だった原道彦さん等数名の方々に、芸術館前に植えていただいた楷（かい）の木は、この閑谷学校に生えている楷の木の子供です。土公さんを通して入手しました。「孔子の木」とも言われ、日本人が中国の孔子の墓地から採取した種を大正4年に日本に持ち帰り育苗し、植えられたものようです。

この楷の木の導きかもしれませんが、静養館で子供たちとともに「論語」の素読をするようになり、楷の木は私の頭から離れなくなりました。毎年紅葉を楽しみにして来ましたが、宮崎の風土に合わないのか虫がついたりして、例年パツとしません。

今回、この旅行の工程に入れようと思ったのは、大原孫三郎氏の人格を形成するにおいて、この閑谷学校での体験は重要な影響を与えていると考えて来たからです。大原氏に弱い者の立場に立った経験がなければ、石井十次と心が通じ合うということはありません。人と人が出会えたからと言って、それがすぐに御縁に発展するわけではありません。互いの感性が共鳴し合うことが必要です。その感性を作り出す基盤となる共通の文化的体験が必要です。

閑谷学校に着いての第一印象は、予想していた以上に山の中にあるということ。これじゃ環境は友愛社と変わらない。資料によると、1666年岡山藩主池田光政が墓地選定のためこの地に立ち寄った際、その風光明媚な環境の美しさに感動し、『ここはゆくゆく学校を建てべきところ』と述べたのが事の始まりとか（公益財団法人特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会「閑谷学校」）。

普通、単純にお城の近くに藩校は作るのに、池田光政の感性がすばらしい。光政は領内に閑谷を含めて123か所手習所（学校）を作り、庶民教育に乗り出しますが、家臣の津田永忠が、その後、すべての手習所をこの閑谷学校に統合されたものを、30年かけて、学房、飲室、講堂、聖堂等と整備したのだそうです。幕末、この学校を訪れた横井小楠は、「このように美しい学校は、江戸の昌平黌（しょうへいこう）を除いて他にない」と日記に記したとか。ちなみに、我が高鍋藩の明倫堂が作られたのは1778年です。この閑谷学校は、それよりさらに100年古いのです。その教育文化の奥深さに感動します。

若者たちが論語等の素読を繰返したであろう国宝の講堂は、建築後300年の歳月を感じさせない荘厳なものでした。インターネットで調べた時、現在も論語の素読をやっているように紹介してありましたので、我々もやれないものか事務局に問い合わせてみましたが、許可できないということでした。全国の若者たちがこの天井の高い森厳な講堂に正座して論語を朗読すれば、日本人としての魂もよみがえるのだろうに、もったいないと感じました。

私たちは、学房跡の資料館を見学し、孔子の祭られている聖廟（せいびょう）や閑谷神社をお参りし、記念写真を取って閑谷学校を後にしました。そう言えば聖廟前の楷の木もりっぱでした。紅葉の時期にもう一度来てみたいとも感じました。

さあ、最後の研修地、大原美術館です。大原美術館についた時は、午後1時20分を過ぎていました。最初に、学芸課長の吉川あゆみさんが大原孫三郎さんと児島虎次郎との関係、大原美術館等について説明してくださり、その後子供たちはグループごとに鑑賞のために散っていきました。美観地区散策や買い物も含めて4時半まで、それぞれ自由行動で楽しみました。

私は加計美術館を訪ね、館長の兄と久しぶりに面会し、歓談することができました。コロナでこの2、3年会っていませんでしたが、互いに齢を取りました。

宿はこの日も土佐家旅館でした。岡山理科大で教師を目指して学ぶユウカさん（3年生）とスズカさん（2年生）を夕食に迎えて、先輩からの貴重な助言を子供たちは聞くことができました。

子供たちにとっては、充実し得るものの多かった2泊3日の「自覚旅行」ではなかったかと思えます。コロナ感染症対策も万全を期し、無事に帰園、その後も健康に生活できています。お世話になった方々に、感謝申し上げます。

最後に、子供たちが帰って書いた感想のいくつかを紹介します。

「自覚旅行を通し、石井十次先生の意志の強さ＝子どもを思う気持ちがどれほど大きかったのか、知ることができました。石井十次先生方が『子どものために』と作りあげてきた、この施設で修行ができていて、事にとっても感謝しています。」（チヨ 高1）

「心に余裕がなく落ちこんでいた時に訪れた大師堂での出会いが、孤児救済のきっかけとなり、今の友愛園があるのだと強く感じることができました。」（レン 高2）

「閑谷学校での雰囲気は静養館と似ていることに気づいた。明倫塾（論語の勉強）をすることで生きていく知恵を学び、人間として生きる道に何が必要か学べる。論語を学ぶことで、リーダーになれる力がつくのだと思った。」（ケイテツ 高3）

「一番印象深かったのは、卒園生との交流です。友愛園にいることは恥ずかしいことではなく、誇

るべきことといわれました。自分は恵まれた環境にいて、何も恥ずかしいことではないんだと理解しました。私が友愛園で楽しく過ごせているのは、たくさんの周りの人の支えがあるからということも改めて実感しました。」 (ナツコ 高1)